

大相撲の教育制度に対する一考察

A study on education system of GRAND SUMO

1K05B100

酒井 悠一

指導教員

主査 作野誠一先生

副査 矢野尊之先生

第1章 序論

大相撲は、筆者自身が幼少からファンであること、またスポーツ教育学を専攻してきた身にとってとても興味深い題材である。大相撲は独自の社会システムである相撲部屋を持ち、弟子育成は、競技者としてだけでなく、人間教育の場でもあり、他のプロスポーツの選手育成とは全く異なった特殊性がある。

昨今、力士の不祥事などでその組織的改革が内外から期待されている大相撲だが、相撲界はそのほとんどが力士を経験しており、家族的な運営で組織が形成されている。よって本論では相撲界における力士の教育制度に着目し、その内容に対し提言をすることを目的とする。

第2章 相撲の歴史

相撲の歴史は古く、記紀神話まで遡る。神占いとして天皇は国家事業として相撲を行い、国をまとめた。相撲が神事とされたのはそれが所以である。やがて、朝廷の公式行事としては衰退していくが、全国の農村では引き続き好んで相撲が行なわれた。やがて、プロの相撲集団が形成され、江戸時代では何度か禁止令に合いながらも、勧進相撲の興行を定期的に行なうようになり、相撲部屋など組織が固まっていく。明治に入り、明らかに封建的だった相撲は危機に立たされるが、時代に合わせて様々な改革を行い、社会に併せることで存続し今に至る。

第3章 大相撲における教育制度

今までの弟子育成の歴史を振り返れば、現

在の品格を重視する流れは、横綱常陸山と双葉山による影響が強いと結論付けた。この二人の横綱はそれぞれの時代の相撲界の危機を立て直し、相撲を人間修業と位置づけ、格式を高めることで単なる興行ではない大相撲の魅力を作り出した。

現在、その流れを引き継ぐ形の大相撲における教育制度は、教会全体で行われる相撲教習所での教育と、部屋別に行なわれる二種類である。相撲教習所はカリキュラムが人材の多様化に対応していないこと、相撲部屋では指導方針にばらつきがあることが問題点である。

第4章 実例研究

この章では朝青龍問題と時太山の死亡事件を題材に教育制度の視点から分析を行なった。朝青龍は外国人力士の日本理解、親方の指導体制、横綱の品格の問題があり、一方の事件では、相撲界に昔から残る体罰、いじめ等が問題である。いずれの問題にしても、「力が強いことが全て」という考えでは、武道という意味でも、神事という意味でも、またスポーツという視点でも大きな間違いが起こりうると言え、部屋での人間教育が相撲界の今後に大きな意味を与えるのは間違い無い。指導者の自覚と時代に合わせた改革が必要である。

第5章 考察

相撲界が現在目指している力士像は非常に見えにくい。スポーツ興行であると共に伝統文化であるという相撲界の立場は、相撲界に馴染めないまま関取に上がる学生力士や、外国人力士ら

にとって、明らかな上位優遇社会であるのに、競技力よりも品格を求められるという矛盾を引き起こしており、それだけに最近の関取力士に品格を重視する意識が少ない、という結果を生んでいる。しかし、下積みを充分にして修行している中卒力士は、相撲界の教育が浸透しており、伝統的な部分を大切にしようという意識が強い。伝統的な共同生活を維持し、学生力士や外国人力士が簡単に関取になれないような「叩き上げ力士」の養成が望まれる。

第6章 統括と提言

最後に今までの調査をまとめ、現在の相撲界

の教育制度に対し、提言を行った。現在の相撲界の教育制度は学生や外国人のスピード出世力士に対応出来ていない。故に、品格やしきたりを重視する意味が弱まり、大相撲は文化的危機に直面している。彼らが大相撲の教育を十分に受けるためには、より長い期間の下積み生活が必要である。故に、「叩き上げ力士」の強化が望まれる。

そのため、有望な人材を揃えるためにも部屋で高卒の資格を取らせて引退後の生活のバックアップを行うなど、より一層充実した、中学生にとって魅力的な相撲部屋での教育が不可欠なのである。